

## 記事の訂正

『大学史研究通信』第14号3ページ、「関西学院学院史資料室長宛資料」において誤植がありました。

(誤) 中央だ広報部大学史編集課 → (正) 中央大学広報部大学史編集課

関係各位には大変ご迷惑をおかけいたしました。ここに慎んでお詫び申し上げます。

## 編集後記

『大学史研究通信』第15号をお届けいたします。今号から発行年月日を明示するようにいたしました。また、年度末ということでさまざまな催し物の総括を行うためページ数も従来より多くなりました。「書評への応答」など新しい試みも始めました。会員のみなさまの反応を楽しみにしております。

さて、「グローバリゼーション」がキーワードとなっている昨今、大学史研究会においても活発な情報交換が必要かと思われれます。学生もインターネットで就職活動をする昨今、メディアリテラシーの重要性は高まっています。しかしながら「グーテンベルクの銀河系」が消えてなくなるかというところではありません。紙にはまだまだデジタルがかなわない長所が多々あります。デジタル化と平行して旧来のペーパーメディアのほうにも力を入れていきたいと考えています。そこで会員の皆様からの『通信』への投稿、企画応募などお待ちしております。(事務局:進藤修一)

〒192-0003 八王子市丹木町1-236 創価大学教育学部 坂本辰朗研究室内 大学史研究会  
TEL 0426-91-4602 FAX 0426-91-9309 EMAIL sakamoto@s.soka.ac.jp

# 大学史研究通信

New Series No. 15

(31. Dec. 1998)

## 新入会員紹介

以下の方々が新たに入会されましたので事務局よりご紹介いたします(敬称略・五十音順)

### [機関会員]

早稲田大学大学史資料センター

169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1

TEL 03-5286-1814 (直通) FAX 03-5286-1815 (直通)

所長:牛山積 事務長:金子宏二 連絡担当:菊池絃一

E-mail:kkarchvs@staff.waseda.ac.jp

### [個人会員]

香川せつ子 (西九州大学)

研究分野 イギリス女子高等教育史、19世紀の女性高等教育運動を、女性史との関連性において考察しています。

## 新入会員自己紹介・研究紹介

大学史研究通信ではこれまで事務局・編集担当による新入会員の紹介を行ってききましたが、この度あらたに新入会員のみなさんに自己紹介・研究紹介をお願いすることにしました(敬称略、あいうえお順)。

### 岡田 大士(東京工業大学大学院)

私は日本の理工系高等教育の歴史に関心があります。これは私が高校時代理系志望だったのと、立命館大学に在学中、丁度理工学部の大改革が行われ、その様子を目にすることになったからでしょう。そして現在の東京工業大学では科学史の梶雅範助教授、技術史の木本忠明教授の御指導を受けながら修士論文の発表準備を進めております。

修士論文では「終戦直後の大学改革に関する歴史的分析～東京工業大学の場合～」と題し、終戦直後に東工大で行われた大学改革についての分析を行っております。この大学改革については「和田改革」と呼ばれるように、当時の学長和田小六個人の先見性に注目した研究がこれまで行われてきました。私は改革案を策定した「刷新委員会」と呼ばれる教授・助教授グループの集団的活動に注目し、当時の助教授が残した議事録メモをもとに構成メンバーや議論の過程を明らかにすることを目指しております。

## 木村 靖二(東京大学)

このたび新会員となりました。現在、東京大学大学院人文社会系研究科教授で、文学部西洋史学科でドイツ近現代史を担当しています。19世紀以降のドイツ史をやっていますが、書いたものとしては20世紀ドイツ史に関する者が大部分です。業績といえるようなものは大してありませんが、「兵士の革命 ドイツ1918年」(東大出版会 1988)、「世界歴史大系 ドイツ史」第3巻、「中公世界の歴史 現代の開幕と大衆文化」などです。大学史についてはドイツの教養市民層との関連で関心を持っており、これまでも大学史研究掲載の諸論文から有益な示唆を受けてきました。私自身は直接大学史を扱う能力はありませんが、大学院生の中にはこうした分野に関心を持つ者も多く、一方的な受益者の立場で申し訳ない次第ですが、引き続き多くの示唆を得ることができればと考えています。なお、この会をご紹介いただいた関西学院大学の早島氏とは私が1968年 DAAD 奨学生としてミュンヘンに学んでいたときにいろいろお世話をいただき、それ以来親しくしていただいています。よろしく。

## 寺岡 英裕(中央大学大学院)

中世ドイツ大学に対する認識は、ここ数十年で大きく変化しました。学籍簿や学寮名簿、個人の経歴などをもとに、それが属する集団(この場合は大学)を再構成しようとする、いわゆるプロソポグラフィという手法は、従来の理想郷の大学像を打ち砕き、大学内における身分的経済的ヒエラルキーの支配を明らかにした。さらに最近では、修学による身分上昇の可能性すら否定される傾向にあり、もはや中世ドイツ大学は内部構造に関する限り、それを取り囲む社会と何ら変わるところのない「中世世界の忠実な鏡」とみなされるに至ったのである。

それでは、我々は一体どのように、中世ドイツ大学を特徴づけることができるのであろうか。この点において、最近注目されているのが、大学の「社会への影響」である。すなわち宮廷や教会における修学者の、出身大学・学位などを詳細に調査することにより、大学、あるいはそこでの修学が社会に対して及ぼした影響を検討し、中世ドイツ大学の持つ意味を探ろうとする試みがなされつつある。

私はドイツ中世史専攻という立場から、中世ドイツ特有の皇帝・教皇問題の方向からこの問題にアプローチしている。より具体的には、皇帝・教皇問題が最も激しい形で現れた教会分裂期の、皇帝顧問団における大学教師並びに修学者を調査している。検討結果は修士論文にまとめる予定であるが、この研究によって、教会分裂という中世ヨーロッパを揺るがせた現象において、大学が果たした役割を明らかにしてみたい。

## 鳩沢 歩(大阪大学)

1980年代後半に経済学部に入り、80年代末から90年代初頭にかけて大学院経済学研究科というところで学んだことに、今日の私の研究活動は存外に深い部分で影響を受けているように思います。怠惰な学生ほど、通っている学校のミリューにかぶれやすいというのはあるものようです。

これまでドイツ語圏における工業化をテーマに数本の論文を発表しましたが、そのうちには、いわゆる新古典派経済学の「市場」観ばかりではなく、その手法をも共有しようとしたものも含まれています。

ところが最近では、19世紀の鉄道業を対象に、そこに勤務した職員に「社会史」的な調査を加える作業にとりかかっています。このたび大学史研究会にご縁ができましたのも、鉄道技師についていくらか調べたのがきっかけでした。

この不況下、「経済の時代」の終わりとかで、どうも一種の「転向」の観もあるのですが、自分ではそうでもないようだと考えております。人的資源の育成と組織の効率性は、現代経済学のもっとも重要な研究課題の一つだからです。今後よろしくご教導くださいますようお願いいたします。

おける経済学の位置について話をし、また共同研究をすることになるはずで。

## --研究動向--

### フンボルト・インターナショナル

早島 瑛 (関西学院大学)

『大学史研究』第13号で新しい国際雑誌『大学史年報』(Jahrbuch für Universitätsgeschichte)の創刊号について述べたとき、ドイツやスイスの研究者によって創設された「大学史と学問史のための学会」(Gesellschaft für Universitäts- und Wissenschaftsgeschichte)について触れたが、この学会は明年秋、フンボルトに関する国際的・学際的なシンポジウムをスイスにおいて開催することになった。題して「フンボルト・インターナショナル」(*Humboldt international*)、開催地はカントン・ベルンのジークリスヴィル(Sigriswil)。ジークリスヴィルはトゥーン湖に面したグンテン(Gunten)の東北2キロにあり、標高800メートル、インターラーケンとトゥーンの中間に位置する人口3500の風光明媚な小村である。開催責任者は学会事務局代表のシュヴィングス(Rainer C. Schwinges)、参加者は世界各国から60名が予定されている。

シンポジウムは4部構成であるが、近代ドイツ大学史に関心をもつ立場からみてペーター・モーラフの時代区分でいう「前古典」から「古典期」への移行期とドイツ第二帝制崩壊までの「古典期」を対象とし、ドイツにおけるフンボルト・モデルの形成と展開を扱う第1部(6報告)が最も興味深い。

- 1) Peter Moraw, Universität, Gelehrte und Gelehrsamkeit in Deutschland vor und um 1800.
- 2) Helmut G. Walther, Reform vor der Reform. Die Erfahrungen Wilhelm von Humboldts in Jena 1794-1798.
- 3) Rüdiger vom Bruch, Gründung der Berliner Universität.
- 4) Sylvia Paletschek, Die Verbreitung des Humboldt'schen Modells in Deutschland.
- 5) Marita Baumgarten, Professorenprofile im Humboldt'schen Modell 1810-1918.
- 6) Detlev K. Müller, Studenten und Studentinnen an Humboldts Universitäten 1810-1918.

第2部と第3部はヨーロッパと非ヨーロッパ世界におけるフンボルト理念の受容を扱う。ここではスイス、イギリス、フランス、イタリア、オランダ、ベルギー、オーストリア・ハンガリー、ロシア、デンマーク、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、バルト海諸国、イベリア・南米諸国、日本、中国、米国、カナダの各国における「フンボルト・モデルの受容」(*Humboldts Rezeption*)が対象である。第4部はフンボルトと学問論(*Humboldt und die Disziplinen*)。自然科学(とくに物理と化学)、精神科学、教育学、心理学、社会学、経済学、医学、生物学、法学、神学を扱う。第4部ではさらに「学問の自由」(*Wissenschaftsfreiheit*)と「フンボルト・モデルと第三帝国」(*Humboldts Universität auf dem Weg ins Dritte Reich*)の報告が予定されており、前者の報告者は我が国でも著名なアイヒシュテット大学のミュラー(Rainer A. Müller)、後者がフランクフルト大学のハンマーシュタイン(Notker Hammerstein)である。20世紀も終わりになって、19世紀はじめの「フンボルト」を如何に再評価しようとするのか。また、ヒトラーを生んだドイツ語圏の大学史研究者が第三帝国における大学人の思想と行動、換言すればフンボルトの理念とナチスとの関係を如何に問題にするのか。シンポジウムの成果の公刊が期待される所以である。

H-NCC	The National Coordinating Committee for the Promotion of History
H-NEXA	The Science-Humanities Convergence Forum
H-Nilas	Nature in Legend and Story
H-Ohio	History and Culture of the State of Ohio
H-OIEAHG	Colonial and Early American History
H-Oralhist	Studies Related to Oral History

## 書評への応答

『大学史研究』第13号に掲載された米山光義氏の書評(松野尾裕氏著『田口卯吉と経済学協会—啓蒙時代の経済学』[日本経済評論社、1996年]への書評)へ著者の松野尾裕氏より応答をいただきました。一方通行になりがちな論評に議論の場を設定するという試みです。

啓蒙の社会的基盤とは—拙著への書評を読んで—

松野尾 裕 (愛媛大学教育学部)

『大学史研究』第13号(1998年)に掲載された米山光義さんの拙著『田口卯吉と経済学協会—啓蒙時代の経済学』に対する書評を拝読しました。私の関心の所在をていねいに読み取ってくださった米山さんに心よりお礼を申し上げます。また本書刊行後いち早く書評欄へ本書を推薦してくださった早島瑛さんは、私にこの応答の一文の執筆をも勧めてくださいました。怠け心ばかりおこしやすい私への戒めとして受けとめます。

米山さんのご指摘は、本書では田口の主宰した経済学協会の啓蒙活動を主題としていながら、その活動の「民衆との接点」あるいは「民衆的基盤」が見えてこないというものです。その場合、民衆と一口に言ってもその内実はいわゆる豪農層から「底辺民衆」に至るまで重層的で複雑でひと括りにはできないだろうと思います。が、それはともかくとしても、田口らの活動の支持基盤を明らかにすることは、従来から言われている通り研究史上の難問で、経済史研究における田口らの政策主張の分析、政治史研究での田口を含む東京の都市権派の人的つながりの解明、またジャーナリズム史研究での雑誌の購読者層分析などがすでにあるわけですが、なお十分に納得し得る説明はなされていないのが実状です。田口の場合、一人孤立して屹立していたというのではなく、少数派とはいえむしろいつもきちっとまとまった、人格的に信頼しあえる人的関係—友情空間—の中でその仕事を積み重ねていったというのが本書で描いた私の田口像です。つまり田口には結社の精神がその晩年に至るまで濃厚にみなぎっていたといえ、したがってまず、知識人結社の社会史といった文脈の上に研究の展望を見出すことができるだろうと思います。こうした結社としての活動を、民衆というきわめて広範な漠とした存在との関係という点から意義づけることには、本質的な難しさがあるのではないのでしょうか。田口の抱えた困難さは、啓蒙の基盤としての社会—集いと討論—が成熟せぬまま、世間の大勢が平板な商業主義にのみ込まれていくという日本の現実そのものに由来するといっても良いでしょう。

私は経済学の制度化への関心を抱きつつ、制度化の本流であるユニバーシティからはずれ、結果として米山さんが言われる「カウンター・ユニバーシティの内実を持つ数少ない実践例」を描くことになりました。この間、私は自分の研究関心のもう少し広い見取り図を「近代日本の市民生活と経済学」(経済学史学会編『経済学史—課題と展望—』所収)や「日本における『啓蒙の経済学』の思想的水脈」で不十分ながら示しており、そうした関心のなかに本書の研究を位置づけたいと考えているわけです。なお、本書がきっかけとなり、私はドイツ・ボン大学日本学研究室に1999年4月より1年間の予定で招かれることになりました。そこでは日本の近代化に

## 関西学院大学主催学術講演会「科学革命とパラダイム」 98年度大学史研究会第二回例会「近代ヨーロッパエリートの比較研究」

1998年5月28日 於 関西学院大学(兵庫県西宮市)

5月28日、午後1時10分から関西学院大学B号館101号教室において「科学革命とパラダイム」と題する大学主催の学術講演会が開催された。「大学に入って勉学を始めたばかりの新1年生が学問研究の一端に触れることができるように」という趣旨で企画されたものである。講師は中山茂会員であった。これを機会に同日午後3時30分から関西学院大学のD号館において今年度第2回目の例会が開催された。テーマは「エリート研究」、司会は塚原修一会員であった。参加者は池端次郎、井上琢智、進藤修一、高森昭、田村栄子、塚原修一、中山茂、橋本伸也、望田幸男、安原義仁、山本喜一郎(機関会員事務局)、渡辺和行、早島瑛の各会員。会員外では関西学院大学社会学部の石川明氏、岸本静香氏、高坂健次氏の3氏が参加された(合計16名)。また、午後6時から8時30分まで甲東園の今昔庵において懇親会が開催され、会員外では関西学院大学商学部の杉原左右一氏が参加された。報告要旨とコメント要旨は次の通り。(文責・早島瑛)

### 【報告1】

帝制期ロシアのエリート教育システム

橋本 伸也(京都府立大学福祉社会学部)

本報告は、帝制期、とりわけ19世紀からロシア革命にいたる時期のロシアにおけるエリート教育システムの概要を紹介することを試みたものである。ロシア教育史叙述では従来、日本において正則の教育機関と見なされた中学校—大学のアナロジーから、ややもすると国民教育省管下のギムナジアー—大学をもってエリート教育の主たる場として捉える傾向が見られたが、実際にはロシアにおいて、国民教育省以外の教育機関がエリート教育システムにおいて重要な位置を占めたことから、本報告でもそれら多様な中等・高等教育機関を取り上げて、システム総体のよくいえば概括的な、悪くいうならば「大雑把」な図柄を提示することを主眼とした。

報告ではまず、18世紀以前のロシア教育の近代化過程の前提として、(1)18世紀以前の西欧型大学の不在と人文的教養の伝統の微弱さ、(2)ロシア帝国西部国境地域における西欧型大学(リトアニア・ポーランド領のヴィルノのイエズス会アカデミアとその後進の中央学校、リヴォニア・ドイツ騎士団領のデルプト(ドイツ名ドルパット、現エストニアのタルトゥ)のアカデミア)の存在の意義、(3)ピョートル以降の近代化政策における貴族の勤務・教育義務と学術・教育における「実業志向」の問題、(4)近代的官僚制度の未成熟と学校行政の多元性といったことを指摘した上で、本論に入った。

本論では、まず19世紀前半の教育システムの編成原理として「身分制原理」を挙げ、それを「教育のシステムが社会的身分 *со словне* に対応して多元的に区分され、対象とする生徒の身分及び身分内の階層的な位置によって相互に差異化された複雑な学校システムの編成を取っている事態とそうした編成を成立させている理念や制度原理、あるいはそれを支える人びとの心性の全体」と定義した上で、こうした原理を体現した教育機関として陸海軍の幼年学校その他の軍事教育機関、ツァールスコセロー・リツェイと帝立法学校を代表とした文官養成のための貴族の特権的学校について紹介するとともに、西欧とは異なりエリートとは称しがたいものの、身分的学校としては典型的性格を有した神学校—神学大学などが存在したことを指摘した。また、この原理からはみ出して、非貴族の身分間移動と官僚・学術教育要員の養

成のための機能を果たしたものと国民教育省管下のギムナジアー大学があったことを指摘した。

次に、報告の後半では、19世紀後半から20世紀初頭にかけて進展した構造変動について論じた。この構造変動は、(1)国民教育省セクターの比重の拡大と中等教育の複線化、(2)身分的・特権的セクターにおける内部改革と自己保存、(3)国民教育省管下以外での技術系を中心とした高等教育の多様化の進展などのトレンドを指摘し、エリート養成が、全体として特権的セクターから国民教育省管下へと重心の移動を進めつつあったことを述べた。特に(1)については、国民教育省管下中等教育システムにおいて西欧型と類似した古典系と実科系への複線化の進展について制度的にあとづけた。また、(3)については、19世紀末から20世紀初頭に存在した高等教育機関のリストを紹介して、それらが示した多様性と量的な拡大の顕著さを指摘した。それと対照的に、大学では内部的な変化と質的な向上、学生数の拡大などの進展が見られながらも学校数や学部編成などで硬直としていたことも明らかにした。なお、全体を通じて、可能な限り統計的データを紹介して、制度史に加えて動態的把握が行えるようにした。

この報告で述べた諸点は、その後新たに明らかになった事実も含めて、来年度刊行予定の『近代ヨーロッパの探究4 エリート教育』(ミネルヴァ書房)に掲載される2つの拙論に詳述しており、より詳しくはそちらを参照していただければ幸いである。また、この内容をごく簡略的に述べたものとしては拙論「帝制期ロシアの教育システム—エリート教育とその若干の特徴をめぐって—」、『ロシア史研究』第60号、1997年がある。そちらも参照願いたい。

## [報告2]

### フランスにおけるエリート研究の動向

渡辺 和行(香川大学法学部\*)

本報告は、フランスのエリート研究の動向を旧世代の研究から新世代へのそれへの展開として紹介することを目的としている。ここ数年教育社会史が注目を集めている理由は、次の二点にあると考えている。国際政治の上でマルクス主義の影響力が低下したという政治的理由、政治エリートも含めた諸エリート(指導的人物)を多く輩出してきたのが上層中産階級であったというアカデミックな理由である。前者の理由があって後者の理由が浮上してきたのだろう。つまり二階級も出るの教条的なマルクス主義パラダイムから欠落していた中産階級が19世紀に社会的上昇移動を遂げる装置となったのが制度としての学校であったことである。以上が、教育社会史の隆盛を見た根本的理由だと思われる。

旧世代のエリート研究の代表は、ジャン・ロム『権力の座について大ブルジョア 1830-1880』(1960、邦訳、1971)である。本書は、マルクス主義の概念を用いて、土地貴族の伝統的エリートから大ブルジョアの実業エリート、さらには中産階級の「新しい社会層」へと、ブルジョア覇権の樹立と維持および衰退を政治力・経済力・社会力の視点で実証したが、社会力概念が貧弱でありエリート養成の教育システムの重要性は看過されていた。

エリート研究にインパクトを与えたのは、「再生産論」のブルデューの社会学だ。『遺産相続者たち』(パスロンと共著 1964、邦訳、1996)が、高等教育における社会階層間の不平等を実証した。その後も、『再生産』(1970、邦訳、1991)『ディスタンクシオン』(1979、邦訳、1990)と、排除と選別のシステムを持った再生産構造が明らかにされた。かくして、新世代のエリート研究に大きな刺激が与えられる。ロムの書物と同年にアラン・ジラルド『フランスにおける社会的成功』が出され、成功の社会的要因を人口学的・地理学的・社会的要因に分けて論じていたが、再生産という概念はなかった。1960年代には、政治学者の手になる政治エリートの実証的研究が進められるも(マッティ・ドガンやジャン・シャルロの研究)、私的部門や知的圏域のエリートは軽視された。1973年にはブルデューの影響下にブードン『機会の不平等』(邦訳、1983)が

<a href="#">H-Frauen-L</a>	Women and Gender	<a href="#">Jhistory</a>	List for Discussion of History of Journalism and Mass Communication
<a href="#">H-German</a>	German History	<a href="#">PSRT-L</a>	H-Net/APSA Political Science Teaching and Research
<a href="#">H-Grad</a>	For Graduate Students Only		
<a href="#">H-High-S</a>	Teaching High School History and Social Studies		The following lists are affiliated with H-Net
<a href="#">H-Holocaust</a>	Holocaust Studies	<a href="#">APSA-CIVED</a>	Civic Education for the Next Century
<a href="#">H-Ideas</a>	Intellectual History	<a href="#">Economic History Server</a>	Home page for EH.Net, the umbrella organization for the EH lists
<a href="#">H-Indiana</a>	Indiana History and Culture	<a href="#">EH.Disc</a>	Economic History, informal discussion
<a href="#">H-Islamart</a>	History of Islamic Art and Architecture	<a href="#">EH.Eastbloc</a>	Economic history of Eastern Europe
<a href="#">H-Italy</a>	Italian History and Culture	<a href="#">EH.Macro</a>	Macroeconomic history, business cycles
<a href="#">H-ItAm</a>	Italian-American History and Culture	<a href="#">EH.News</a>	Economic history news, announcements
<a href="#">H-Japan</a>	Japanese History and Culture	<a href="#">EH.Res</a>	Economic history research ideas
<a href="#">H-Judaic</a>	Judaica, Jewish History	<a href="#">EH.Teach</a>	Teaching economic history
<a href="#">H-Labor</a>	Labor History	<a href="#">HES</a>	History of economics/economic thought, announcements, discussion
<a href="#">H-LatAm</a>	Latin American History	<a href="#">LPBR-L</a>	Law and Politics Book Review—Reviews only, no discussion
<a href="#">H-Law</a>	Legal and Constitutional History	<a href="#">OZNZ.Society</a>	Australia and New Zealand economic history research, announcements
<a href="#">H-LIS</a>	History of Library and Information Science	<a href="#">Quanhist.recurrent</a>	Comparative analysis of recurrent phenomena
<a href="#">H-Local</a>	State and Local History; Museums		
<a href="#">H-Mac</a>	History and Macintosh Society		
<a href="#">H-Mexico</a>	Mexican History and Mexican Studies		
<a href="#">H-Michigan</a>	History and Culture of Michigan		
<a href="#">H-Mideast-Medieval</a>	The Islamic Lands of the Medieval Period		
<a href="#">H-Minerva</a>	Women and War and Women and the Military		
<a href="#">H-MMedia</a>	High-Tech Teaching, Multimedia, CD-ROM		
<a href="#">H-MusTxt</a>	Musico-Textual Studies		

<u>H-Announce</u>	Academic Announcements	<u>H-SHGAPE</u>	Society for Historians of the Gilded Age and the Progressive Era
<u>H-Antisemitism</u>	Antisemitism	<u>H-Skand</u>	Scandinavian History
<u>H-ANZAU</u>	History of Aotearoa / New Zealand and Australia	<u>H-South</u>	History of the United States South
<u>H-Appalachia</u>	Appalachian History and Studies	<u>H-Soz-u-Kult</u>	Methoden, Theorie und Ergebnisse neuerer Sozial- und Kulturgeschichte
<u>H-Arete</u>	Sports Literature	<u>H-State</u>	History of the Welfare State, "Putting the State Back In."
<u>H-ASEH</u>	Environmental History	<u>H-Survey</u>	Teaching United States History Survey Courses
<u>H-Asia</u>	Asian Studies and History	<u>H-Teach</u>	Teaching College History
<u>H-Bahai</u>	Culture and History of the Baha'i Faith	<u>H-Teachpol</u>	Teaching Political Science (Post-secondary)
<u>H-Business</u>	History of Business and Commerce	<u>H-Texas</u>	History and Culture of Texas
<u>H-California</u>	History and Culture of California	<u>H-Turk</u>	Turkish Studies
<u>H-Canada</u>	Canadian History and Studies	<u>H-UCLEA</u>	Labor studies
<u>H-Cervantes</u>	Life, Times, and Work of Cervantes	<u>H-Urban</u>	Urban History
<u>H-Childhood</u>	History of Childhood and Youth	<u>H-US-Japan</u>	US-Japan Relations
<u>H-CivWar</u>	U.S. Civil War History	<u>H-USA</u>	International Study of the USA
<u>H-CLC</u>	Computers and Literary Studies	<u>H-W-Civ</u>	Teaching Western Civilization Courses
<u>H-Demog</u>	Demographic History	<u>H-War</u>	Military History
<u>H-Diplo</u>	Diplomatic History and International Affairs	<u>H-West</u>	History and Culture of the North American West and Frontiers
<u>H-Ethnic</u>	Ethnic and Immigration History	<u>H-West-Africa</u>	West African History and Culture
<u>H-Film</u>	Cinema History; Uses of the Media	<u>H-Women</u>	Women's History
<u>H-Francais</u>	H-Net liste des Clionautes, sur l'histoire et la geographie en France	<u>H-World</u>	World History
<u>H-France</u>	French History and Culture	<u>HABSBURG</u>	Culture and History of the Central European Habsburg Monarchy and its successor states, 1500 - present

出版され、教育機会の拡大や高等教育への進学率の上昇が経済的機会や社会的機会の平等につながらないことが実証された。

このような社会学の示唆を受けて教育史研究が進められる。ミューラー、リンガー、サイモンたちの研究である。彼らは、19世紀から1920年の時期の英・独・仏の比較教育社会史へと歩を勧め、中等・高等教育の制度と入学者の社会層を実証的に明らかにし、各国のエリート養成の異同を解明した。わが国でも、望田幸男編『国際比較近代中等教育の構造と機能』(1990)が編まれている。同時期のフランスでは、シャルルによるエリートの歴史社会学が展開されていた。パリ大学文学部教授のプロソポグラフィを編んだ彼は、大学エリートに加えて実業エリート、高級官僚など1093人のデータをもとに『共和国のエリート1880-1988』(1987)を公表し、ロムらが描いた以降の新エリートの社会的出自や、出身地・資産・婚姻戦略などのデータから再生産を論証した。この後もシャルルは、同時期の別バージョンたる『「知識人」の誕生1880-1900』(1990)や第三共和政期の大学エリートを論じた『大学人の共和国1870-1940』(1994)、さらには国際比較へと研究を進めた『19世紀ヨーロッパにおける知識人』(1996)も世に問うている。

以上のように、フランスのエリート研究は、マルクス主義の影響下で階級や社会経済的視座に立った研究から、ブルデューの再生産論に示唆を得た実証的な研究へとすすみ、支配の構造がそれだけ明らかにされたと言うことができるだろう。

\* = 渡辺和行会員の所属は報告当時のもの

[コメント1]

イギリスのエリート研究の動向-大学を中心に-

安原 義仁(広島大学教育学部)

ヴィクトリア時代における新たな世俗プロフェッションの勃興とともに、イギリスのエリートは「聖職エリート」から「専門職エリート」へと大きく変化した。この変化はいつ頃、いかなる経緯を経て生じたのか。また、大学はこの変化にどのように関わったのか。

本報告では最近の研究成果を踏まえつつ、近代イギリスにおけるエリート教育の問題を、とくに大学(オックスブリッジ)を中心として次のような観点からみてゆくことの可能性について探ろうとした。すなわち、体系的な近代的エリート養成システムの形成(とくにパブリック・スクールとオックスブリッジの連続・非連続)、教育システムと各界エリート・キャリアとの接続(試験制度と官僚制改革を通しての)、エリート教育の装置(古典語を中心とした教養教育とトータル・インスティテューションでの疑似自治と学生課外文化の奨励)、エリートの属性と性格(「ノブレス・オブリージュ」の精神、献身的公共奉仕、使命感、パターナリズム)などである。

近代イギリスのエリートは「専門職エリート」であった。しかしかれらは「専門職業的実学的知識」によってエリートになったわけではない。いわゆる「虚学エリート」であり、その養成にはパブリック・スクール=オックスブリッジでの教育が大きく作用していた。そしてイギリス社会におけるこの「虚学支配の構造」は第一次大戦までずっと保持された。

[コメント2]

ドイツのエリート研究の動向

進藤 修一(大阪外国語大学外国語学部)

ドイツの教育社会史・エリート研究はこれまでにかなりの研究の蓄積があるが、特に近代にいたりそれまでの血統原理の原則が崩れ、教育と職業資格による「資格原理」が前面に押し出されて

きたことがあきらかになった。そして、エリート教育の根本原理にあるのが、大学進学権を独占したギムナジウムで重視された新人文主義的教育＝古典語教育であった。ここでは「資格」＝「職業上の能力」ととらえられるのではなく、あくまでも古典語の「試験の能力」であった。その点でイギリスと同じく、ドイツにおいてもやはり「虚学エリート」の支配が貫徹していた。このようなエリート生産のしくみがあきらかになり、さらに学校生徒の出自などをもとに、教育による社会的流動化の研究もすすめられている。このような研究状況の中で今後取り組むべき課題としては次のようなものが挙げられる。1. ドイツは学校の設置状況に地域的差異が大きく、いわゆる「ギムナジウム体制」が成立した後、19世紀後半にいたってもなお十分な種類の学校形態を提供し得ない地域が多数存在した。そのような範疇からははずれた地方における就学行動を解明する必要がある。2. 「虚学エリート」の支配構造はドイツにおける急速な工業化を受けて技術系の「実学」から挑戦を受けることになる。しかし、それ以前にも「虚学エリート」は職業的な能力証明に立脚していたわけではない。このようなエリート体制がどのように社会において承認されていたか、すなわちその権威がどのように承認されていたのかを解明する必要があるように思われる。

## 大学史研究会 第21回大学史研究セミナー

大学史研究会第21回研究セミナーが12月5・6日の両日、兵庫県西宮市の関西学院大学にて行われました。両日も多数の参加者をむかえ、熱のこもった報告・議論がおこなわれました(敬称略)。

初日の課題研究は以下のようなプログラムでおこなわれました。

### 課題研究 技師・技術者・工科大学――エンジニアの誕生

司会 塚原修一(国立教育研究所)

報告 コメント

フランス 堀内達夫(大阪市立大学) フランス 渡辺和行(奈良女子大学)

ドイツ 鳩沢 歩(大阪大学) ドイツ 高橋秀行(神戸大学)

日本 高橋雄造(東京農工大学) 日本 橋本毅彦(東京大学)

全体討議

研究終了後、関西学院大学のキャンパス見学会が準備されており、甲山のふもとの美しいキャンパスを知る機会を得ました。引き続き関西学院内「新月クラブ」にて総会・懇親会がおこなわれ、会員同士の親睦が一層深められたことと思います。

二日目の自由研究は報告が三本予定されており、以下のプログラムでとりおこなわれました。また、中国より帰国された中山茂会員の講演がおこなわれました。

### 自由研究(午前)

司会 進藤修一(大阪外国語大学)

報告者 坂本辰朗(創価大学) ハーバード女性試験の成立と意義

服部 伸(岐阜大学) ホメオパシー民間人運動についての医学部―帝政ドイツ

称されています。…の部分に主題が入ります)は「人文学・社会史・文化史―近現代社会史・文化史の方法論、理論、研究成果」(使用言語は基本的にドイツ語、英語も可)という看板を掲げており、多種多様な情報が流通していますが、新刊雑誌の目次、学術会議の予告、論文投稿の呼びかけ、研究プロジェクト参加への呼びかけ、大学院生への奨学金情報、書評、新しいインターネットリソースのアナウンス、各種質問事項というのが主なところでしょうか。目を通すだけでも結構大変ですが、瞬時にして情報を得ることができるため、研究スタイルもかなり代わって行くのではないのでしょうか。書評などは信頼性のおけるものかどうか疑問視されていたこともありましたが、最近ではいわゆる「著名研究者」の投稿も増えています。このH-Netのホームのアドレスは以下の通りです。ここからメーリングリストへ行きたい方は”H-Net Discussion Networks”という項目をクリックしてください。

アドレス <http://www.h-net.msu.edu/>

さらに現在どのようなリストが開設されているか一覧表を作成しました。下線を引いたものがリストの略称、その右側がリストの主要テーマとなっています(出典:<http://www.h-net.msu.edu/lists/>より作成)

List Name	Description
<u>E-Review</u>	<u>H-PCAACA</u> Popular Culture Association and the American Culture Association
<u>EDTECH</u>	Educational Technology <u>H-Pol</u> United States Political History
<u>H-AfrArts</u>	African Expressive Culture <u>H-Polmeth</u> H-NET/APSA List for Political Methodology
<u>H-Africa</u>	African History and Culture <u>H-Review</u> H-Net Book Reviews (reviews only, no discussion)
<u>H-AfrLitCine</u>	Teaching and Study of African <u>H-Rhetor</u> History of Rhetoric and Communications Literature and Cinema
<u>H-Afro-Am</u>	African-American Studies <u>H-Rural</u> Rural and Agricultural History
<u>H-AfrPol</u>	Current African Politics <u>H-Russia</u> Russian History
<u>H-AfrTeach</u>	Teaching African History and <u>H-SAE</u> Society for the Anthropology of Europe Studies
<u>H-AHC</u>	Association for History and <u>H-SAfrica</u> South African History Computing
<u>H-Albion</u>	British and Irish History <u>H-SAWH</u> Women and Gender in the U.S. South
<u>H-AmIndian</u>	American Indian History and <u>H-Scholar</u> Independent Scholars and Scholarship Culture
<u>H-AmRel</u>	American Religious History <u>H-Sci-Med-Tech</u> History of Science, Medicine and Technology
<u>H-Amstdy</u>	American Studies <u>H-SHEAR</u> Early American Republic

自由研究(午後)

司会 早島 瑛(関西学院大学)

報告者 高森 昭(関西学院大学) ベルリン大学学則(1816年)の東京帝国大学学則への影響

講演 中山 茂(神奈川大学)「北京から帰国して」

**大学史研究会 1998年度会計報告・1999年度予算案**

今年度総会で報告されました会計報告および予算案を掲載いたします。総会の場でありました質問事項(科目の不一致)につきましては、事務局で検討した結果、資料作成上の手違いと判明いたしました。ご意見を反映させてあります。ご指摘ありがとうございました。

**1998年度会計報告**

**自1997.12.6 ~ 至1998.12.4**

収入

支出

科目	金額	科目	金額
前年度繰越金	¥2,008,281	通信・印刷費	¥43,218
`97 セミナー準備金返還	¥150,000	「大学史研究」印刷費	¥112,875
年会費	¥456,500	「大学史研究」編集・発送経費	¥50,000
入会金	¥4,000	アルバイト代	¥3,200
「大学史研究」売上金	¥6,410	`97セミナー開催経費補填	¥13,198
郵便貯金口座・銀行口座利息	¥1,993	諸雑費(文具・送金手数料)	¥5,617
信託銀行「ヒット」利息	¥2,440	`98セミナー開催準備金	¥150,000
		調整金	¥47,551
		翌年度繰越金	¥2,203,965
計	¥2,629,624	計	¥2,629,624

1994年1月13日 三井信託銀行へ¥500,000.の指定金銭信託(ヒット)契約(1998年9月25日現在残高 ¥515,673.)

1997年4月14日 三井信託銀行へ¥500,000.の指定金銭信託(ヒット)契約(1998年9月25日現在残高 ¥501,831.)

(上記、金銭信託 1998年9月25日現在総残高 ¥101,7504. 配当率・年0.30%)

★「支出」欄 科目中の「調整金」とは、1997年度中の会計支出でありながら、97年度会計に未計上だった金額¥43,551.(通信印刷費)、及び年会費過分額納入会員(1名)への返還金¥4,000.の合計である。

## 収入

## 支出

科目	金額	科目	金額
前年度繰越金	¥2,354,227	通信・印刷費	¥100,000
'98 セミナー準備金返還	¥150,000	「大学史研究」印刷費	¥130,000
年会費	¥500,000	「大学史研究」編集・発送経費	¥50,000
入会金	¥10,000	アルバイト代	¥20,000
「大学史研究」売上金	¥10,000	諸雑費(文具・送金手数料等)	¥10,000
郵便貯金口座・銀行口座利息	¥2,000	'99セミナー・例会開催準備金	¥150,000
信託銀行「ヒット」利息	¥2,500	翌年度繰越金	¥2,568,727
計	¥3,028,727	計	¥3,028,727

会計担当:大川 一毅

## インターネットで情報検索(2)

## メーリングリスト"H-Net, Humanities &amp; Social Sciences Online"

インターネットで情報を集める際によく質問されるのは、「どうやって調べたらいいの?」ということです。もちろん、Yahoo!のようなサーチエンジンで検索するのはひとつの手段です(www.yahoo.com)。しかし、最近では情報量が急速に増加しているため、目的の情報にたどり着くまでに恐ろしく時間がかかってしまうこともあります。各研究分野にはポータル(門)の役目を果たしているものもあり(例えば「歴史学研究リンク」などというもの)、これは多少利便ですが、やはりページを見たら大学案内以上のものはなかった、などということがしばしばです。そのようななかで最近注目されてきたのがメーリングリストと呼ばれるしくみです。これは情報交換サークルのようなもので、例えば仮に「大学史研究会リスト」というものがあつたとします。そこにメールを送って自分のアドレスを登録します。そのアドレスを登録した全員がメンバーになり、一人のメンバーがリスト宛にメールの形で発信した情報はそのリストの全員に配信されるというしくみです。ここでの基本精神は「相互扶助」ですので、質問に対しては、誰か情報をもっている人が答えてあげるのがエチケットです。

表題にあります"H-Net, Humanities & Social Sciences Online"はアメリカのミシガン州立大学にホストサーバーが設置されていますが、人文・社会科学の情報交換を目的に運営されています。まずはこのホームページにいきましょう。そこではさまざまな主題でメーリングリストが設置されています。それぞれのリストの主催者により運営方法も違い、申し込みメールを送るだけで大丈夫な場合もあれば、入会条件としてこちらの身分、専攻分野などを事細かに質問してくるところもあります。

無事入会申し込みが終わるとウェルカムメールが送られてくることが多いようです。そしてすぐに世界各国から情報が舞い込みます。私が参加しているH-Soz-u-Kult(このリストはH-…と